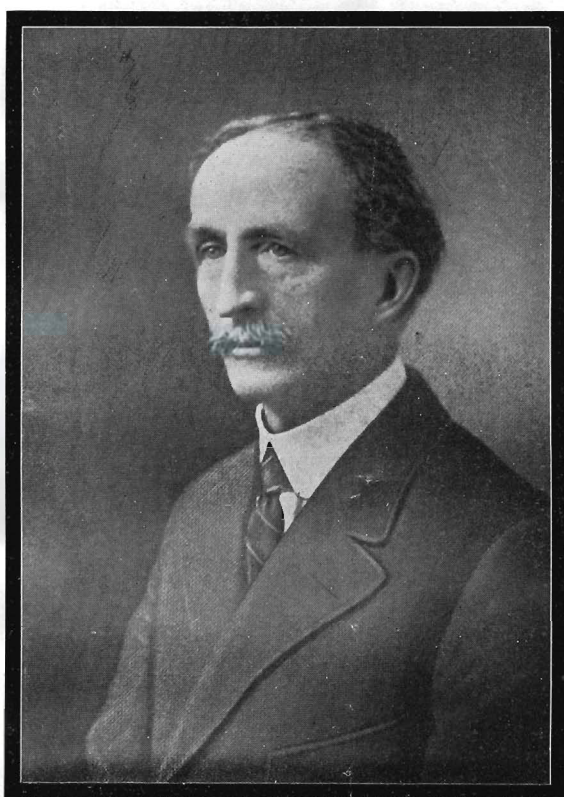


札幌同窓會第六十回報告（昭和十三年十二月）

故農學博士ウヰリヤム・ペンブルックス先生小傳

宮 部 金 吾



故ツルブスク氏

## 故農學博士ウヰリアム・ペン・ブルックス先生小傳

ブルックス先生はドクトル・クラークの一行に遅れ、札幌農學校設立に参加する爲、明治十年二月着任、専ら農學の授業を擔當され又農園長の職を兼られた。而して明治二十一年十月契約滿期歸國の途につかれし時まで實に十二年の長期間に亘り札幌農學校初期の學生の薫陶に當られ又札幌縣及北海道勸業顧問として北海道開發上に多大の貢獻をされた。歸國に際し其の功績に對して勳四等に敘せられ旭日章を賜はり、又大正八年七月十五日農學博士會の推薦により文部大臣から農學博士の學位を授與せられた。

Dr. William Penn Brooks は一八五一年(嘉永四年)十一月十九日 Massachusetts 州 S. Scituate 村の農家に生れた。父は Nathaniel Brooks 母は Rebecca Partridge (Cushing) と言ふ。一八七一年に Amherst 市に於ける Massachusetts State Agricultural College に入學し、一八七五年(明治八年)第五期生の首席として卒業された。在學中クラーク先生の有名な植物生理學の實驗に参加を許され、約四十種の樹木の液汁溢出の觀察を擔當した。クラーク先生の著 "Observations on the Phenomena of Plant Life" 中に特に此事につき記載されてゐるが、これを見ても學生中より科學的觀察の才能を現はして居つたことが明かである。又綜合的統制力を著しく有して居つたことは既に在學中 Phi Sigma Kappa の Fraternity の創立に關し與つて大いに力があつたことにも分かるのである。

卒業後は尙研究生として學校に留まり化學と植物學を専攻して居つたが、折しも日本政府の招聘があり、これに應じて來朝されたのである。

札幌農學校に於ける農學の教師としては最も重要な學科の擔當者とし學生全部の尊敬の的となつて居られた。授業は理論と實地とに分れ、理論は總て講義に依り、其學理を最も簡明に叙述さるゝ豫力められた。又實地は農業實習を

毎週六時間行ひ、且先生の主張により賃銀として一時間金五錢を給與された。これは賃金を得るには共に對する勞力が必要であることを知らしめ、斯くして金銭の價値を正しく認識せしめようとしたのである。

先生の勸告により開拓使にて第一回農業博覽會を開催することとなり、明治十一年十月十五、十六の兩日に亘り札幌大通西三丁目に其會場を設け大成功を博した。

農園の大部分、北八條邊より北十五條まで西一丁目より西六丁目に亘る地域が低濕の地であつて其排水を要する爲明治十二年米國より耕水土管の製造機械を輸入し數年を費して其改良を完成した。

又同年頃米國北部産の蘆粟 (Minnesota Early Amber Sugar Cane) の種子を輸入試作したるに能く風土に適することが判り、砂糖並にシラップ製造の諸機械を輸入して製造に従事した。そして良質のものを生産することに成功したが、收支相償はざることが分り其栽培を中止した。

農園試作の結果、作物中玉葱が最も能く札幌附近の風土に適し且最も有利であることを知り、近村の農家に其栽培を奨励された。札幌村の玉葱生産地として今日其名聲を馳せるは全く先生の賜であつたと稱すべきである。佐藤昌介男の御手紙中明治十五年の頃同村の「武井總藏なる者を指導され候事は確かにて小生ブルックス先生と同伴實地指導に預りし記憶有之候」云々に依りても明である。

明治十三年(一八八〇年)八月 Prof. D. P. Penhalow が歸國後先生は數頭心得を台せられ又植物學に關する授業並に經營も先生の擔當する處となつた。

明治十七年頃より農學の講義中に植物病理に關する講義を始められた。

明治十五年(一八八二年)に私暇を得て歸國され、Eva Bancroft Hall嬢と結婚して歸札、それより七年間札幌に於て樂しき家庭を営まれ、二子をあげられた。長女は Rachel Bancroft と言ひ、一九〇七年に George Drew 氏に嫁ぎ、長男は Sumner Cushing と呼び、ハーバード大學に Prof. Osterhaut の指導の下に植物生理學を専攻し Ph. D. の學位を得られ、後ワシントン府に於ける衛生局の技師として居ること約七年、更に一九二七年に現在の位置であるカリ

フォルニヤ大學の動物學教室の教授となられた。ハーバート大學に在學中同じ専門の才媛 Margaret Alcedanah 嬢と結婚された。爾來兩人共生物細胞生理の研究を繼續し發表されたる論文の數は頗る多量に達して居る。

明治二十一年十月日本政府との契約満期となり歸國の途につかれた。翌年一八八九年の一月母校マ州立農科大學の農學教授を拜命し、同時にマ州立農事試験場の技師を兼ねられた。在職中私暇を得て、一八九六年八月家族同伴滿一年間獨逸に遊學し専ら *Plant* 大學にて研究に従事して *B.D.* の學位を得て歸へられた。然るに先生は教育事業よりは寧ろ試験事業に深く興味を感じられ、一九〇六年に試験場長の職に就かれ、大學の方は講師として其の關係を保たれた。一九一八年の頃重き腦神經衰弱病に罹られたが、總ての職より退かれ専ら靜養に盡くされた爲全く快癒されるに至つた。一九二一年滿七十歳の停年に達するまで試験場顧問技師として其の事業に關係して居られた。

一九二四年に最愛の令夫人を失はれたのは先生にとり此上もなき大打撃であつた。夫人は聰明優雅な賢婦人であつて在札中は知人敬愛の的となつて居られた。又歸國後も終身熱誠に日本を愛する者の一人であられた。

寂寞孤獨の生活を遂つて居られた處、子女達のすゝめにより再び内助者を迎へることとなり、一九二七年 Mrs. Grace L. Holden と結婚された。時年七十六。

隠退後はアムストの自邸に於て専心園藝に従事して居られた。一九三〇年九月二十三日附の手紙に次の様なことが書いてあつた。

「私は一八五一年十一月の生れである。然し尙今頑健であることを喜ぶ。私はまだ自分で自動車を運転し、又園内に於ける總ての仕事も自分でなしてゐる。蔬菜、果樹及花卉の栽培は自分にとり此上もなき樂しみであり、又身体を壯健に保つて呉れてゐる。現在 Hybrid tea roses を二十餘種も栽培して居るが六月中旬より今日まで花が絶へない。」

先生にとり老後を飾る名譽は、一九三二年母校第六十二回卒業式場に於て先生が多年農學の爲め盡された光輝ある幾多の功績に對し Doctor of Agriculture の名譽學位を授與されたことである。

先生が老いて益々壯んであつたことは八十四歳の時カリフォルニアの令息を見舞ふ爲め一人で飛行機にて行かれたことでも明かである。

詳細の事情は不明であるが何でも墜落が原因で本年三月八日逝去されたと云ふことである。享年八十七歳。洵に哀惜の至りに堪へぬ次第である。

先生の學界に残された業績は重に關係された學校や農事試験場、州農務局並に學會等の報告に發表された。其の數は頗る多し。著書としては一九〇一年に出版された三卷物の“*Agriculture*”と題する教科書と“*Science as Applied to Agriculture*”と題する講演録がある。

先生の爲人を一言にして云へば先生は極めて眞面目なしかも深切なデニントルマンであつたと云へる。札幌農學校の舊い卒業生がアムストの御宅を訪問すると夫人と共にいつも非常な歓迎をして下さつた。そして最後まで札幌の大學生の繁榮と日本帝國の隆盛を祈つて居て下さつた。

宮 部 金 吾